日本近代文學館

公益財団法人
日本近代文学館

〈駒場ノート〉(38)
新たな展覧会事業に向けて

坂上　弘

台風一過、陽差しがもどり、駒場の館のまわりには椎の実が落ちている。今年、開館五十周年を迎えた企画展はいずれも好評で、その掉尾を飾る「漱石・芥川・太宰から現代作家まで―近代文学、再発見！」はまだ会期中なので、六十名をこえる人気作家の貴重な資料がどんな文学の系譜を織りなすのかをぜひごらんいただきたい。

編集担当の安藤宏理事は、〝点在する資料が一本の線になって繋がって見えてくる面白さ〟を味わうと語る。文学展の本道ともいうべき、資料と作家の、それは詩であろうか、心に触れていただきたい。

ところで、去る十月の定例理事会でも報告されたが、また先号のこの欄でもご紹介したが、七月に行われた初の国語教育企画展「教科書のなかの文学／教室のそとの文学―芥川龍之介『羅生門』とその時代」は、私どもの五十周年記念事業のなかでも、大変共感を得ることができた。

高校の教材に最も長く採用されてきた芥川龍之介「羅生門」をめぐって、その成り立ちや創作のすがた、時代を経て研究された反響を網羅して展示した。その結果、二千三百人の来館者があり、多数のご意見・反響がえられた。思いがけない多くのアンケート結果に見る声は、先号にもご紹介したので省くが、貴重な事実が得られた。

たとえば「羅生門」を履修する高校生向けを意図した展示だったが、実際には中学、高校、大学を問わず、多くの学校の先生方から団体見学の申込みがあった。

そして若い世代からだけでなく、年配の来館者からも、今後も教科書と文学というテーマを続けて欲しいという声援があった。こうして教育現場と文学館が手をつなぐ試みが始まったことを喜びたい。（館理事長）

―目　次―

〈駒場ノート〉新たな展覧会事業に向けて　坂上　弘
〈随想〉非常勤講師時代　近藤　洋太
〈蔵書の中から〉「小公子」「小公女」！　松永　美穂
◇冬季企画展「小説は書き直される―創作のバックヤード」小説は生きている　安藤　宏
〈その頃〉現代俳句の旗手「海程」の終刊　武田　伸一
〈文庫・記念館〉大倉精神文化研究所附属図書館　髙崎　郁子
〈短信〉武藤　祥子
〈館蔵資料紹介〉二葉亭四迷関連書簡から　十川　信介

山川方夫文庫に追加

先に山川みどり氏、坂上弘氏からご寄贈いただいた山川方夫文庫の充実のため、庵原高子氏が氏宛ての山川方夫書簡など一六点、武満浅香氏が山川の武満徹宛て書簡一点をご寄贈くださった。

秋の特別展開催中

館展示ホールでは、十一月二十五日（土）まで、開館五十周年記念展「漱石・芥川・太宰から現代作家まで―近代文学、再発見！」を開催中（編集委員＝安藤宏）。本展は、二〇一四年以降当館に寄贈いただいた資料の中から、全集未収録の夏目漱石書簡（明治四十二年、二葉亭四迷逝去をうけ夫人に宛てた悔み状）をはじめ、初公開資料を含めた選りすぐりの逸品を紹介するもので、明治の文豪から近年の芥川賞・直木賞受賞作家まで、多彩な文学者の原稿、書簡、日記、写真、遺愛の品等六十点余を展観。図録も好評発売中（B5判、カラー三二頁、税込六四〇円）。

また、川端康成記念室では「川端文学の名作Ⅰ」展を同時開催し「伊豆の踊子」「浅草紅団」など初期の名作をとりあげ、執筆の背景や作品の魅力を紹介している。

十二月二日から企画展

十二月二日（土）から二〇一八年二月十日（土）まで、冬季企画展「小説は書き直される―創作のバックヤード」（編集委員＝安藤宏）を開催する。原稿、初出誌、単行本と姿を変えていく「小説」という創作物について、島崎藤村や樋口一葉、太宰治など具体的な作家を例に、作品の誕生と改稿過程をとらえる試み。ノート、草稿、校正刷など、創作の苦心がうかがえる資料を多数出品（四面に紹介記事）。

図書資料委員会

九月三十日、図書資料委員会が開かれ、坂上弘氏が一九七七年に後藤明生、高井有一、古井由吉各氏とともに創刊した文芸誌「文体」をめぐり、終刊に至るまで三年にわたる活動と編集方針、同人や同時代作家との交流についてなど、実際の雑誌資料を示しつつ語った。

十月理事会

十月二十一日、定例の理事会が開かれ、今年度事業の実施状況が報告され、協議された。また、浅草文芸の会や横光利一展実行委員会の企画による展覧会へ、会場を提供し展覧会開催に向け協力することとした（開催は次年度を予定）。

出席は坂上弘理事長、池内輝雄副理事長、中島国彦専務理事、安藤宏、江種満子、栗原敦、紅野謙介、出久根達郎、武藤康史、宗像和重、山崎一穎理事。

全国文学館協議会部会

十月二十七日、第八回展示情報部会が福井県ふるさと文学館で開かれ、三十五の館・団体から四十八名が参加し、翌二十八日には坂井市三国町にあるみくに龍翔館などの見学がおこなわれた。

森鷗外自筆原稿「北条霞亭」についてお知らせとお願い→八面